

小田原市文化振興審議会 第11回会議概要

1 日 時 令和6年10月31日（木）14：00～16：00

2 場 所 小田原市役所4階第3委員会室

3 出席者

（1）委員

杉本委員、萩原委員、大石委員、白井委員、木村委員、上野委員、外郎委員、
鈴木委員、池田委員、浅井委員

（2）行政

大木文化部長、諏訪部文化部副部長、早野文化政策課長、黄金井文化政策係長、
穂坂主査、今宮主任

4 傍聴者 1人

5 会議の概要

- （1）議題（1）小田原ならではの文化によるまちづくり基本計画の評価について
事務局より説明

A 委員

おだわらカルチャーアワードの評価をした方がいいのではないか。継続性を考えていかないと、2回3回と続けるうちに玉切れにもなる。カルチャーアワード実施の際にアンケートなどをとって、評価を載せてもいいのではないか。それを文化振興審議会にフィードバックいただけるとありがたい。選考委員の皆さんのご意見等も伺えれば。

B 委員

選考は妥当だったと思う。選考に漏れた応募者は内容が整っていなかったり、やろうとしている事の理解がされにくかったりしたと思う。ただ、活動している本人は、間違っていない、今後も追求しようという気持ちがある。2回目に再挑戦しようという気持ちになる。

C 委員

選考会が終わった後、参加者はすぐに帰らず残っていて、他の団体と交流したりコラボの話が進んだりした。2024では選考会・表彰式だけでなく、その後に交流会をやりたいと思っており、企画が進んでいる。受賞した方々の中には、その後に拠点ができたり、活動が促進されたりすることもあったようだ。再挑戦がないと継続は難しいと思うので、2024募集チラシにその旨記載している。

A 委員

文化の評価は勝ち負けという事ではないので難しい。再トライする方に、どうアドバイスするかも難しい。文化を広める活動をきちんと評価できるようにしたい。市民に対して活動

を広報し、互いの活動を理解しあってネットワークを作ることも目的としている。皆が文化を楽しんでいるまち、となることが大事だと思う。

C 委員

コミュニティが生まれることが重要である。次回のカルチャーアワードでは、前回賞を取った方々のパネルを展示し紹介するなどしてほしい。

A 委員

前回のカルチャーアワードでは、一人で活動している方も見受けられた。少人数で活動している場合には、孤立化していたり、後継者がいなかったりすることもある。今後に関いていく事が大事である。

D 委員

評価基準等の点からからも、応募しやすい状況をつくりたい。

E 委員

何十年も活動が続いている団体が小田原にはたくさんある。そうした活動実績より、その活動の社会貢献度や、地域社会にどのようにアクセスしているかを、アワードの選考にあたっては評価した。ただ、そうした評価基準が、応募者に伝えきれていなかったことは反省すべきだと思う。

また、企画力と発信力を持っている団体とそうでない団体がある。そうした力を持っている団体は、アワードで出会った他の団体とコラボレーションして新たな活動を生み出すことができるが、そういう団体は少ない。アワードの実行委員会が、コラボレーションを促す役割を果たしていけたらと思う。

C 委員

実績のある団体はたくさんいらっしゃって、内容も敬意を表するところはあるが、高齢化していて、活動を守ることに注力していると感じた。今の時代に合わせて社会化することが難しく、若い人にもっと入ってもらいたいと思っているが、世代交代ができていない団体が多いという印象である。活動団体同士が刺激し合うことができるよう、うまく誘導したい。ただ、カルチャーアワードの場合だけでは関係性を構築できない。もう少し互いが接触する機会が増えないと、マッチングするのは難しい。前回検討した WEEK 事業のように、機会を増やす方法を考えないといけないといけない。

F 委員

アワードの反省を、文化振興審議会に提出・報告した方がいいのではないか。結果と課題の共有をし、議論をした方がいい。アワードでは自分もたくさんの文化活動を発見できた。

C 委員

アワードについては評価の中で文章を増やしてもいい。加筆をしても。

F 委員

評価内容等を見直すとのことだが、目標値等の修正で、项目的には変わらないという事ではないか。また、現在の順調等の評価は、数字にした方が見やすいのではないか。

文化政策課長

項目的には変わらないと考えている。

D 委員

目標2 施策2「文化活動への支援」は、定量的評価の指標がフォロワー数・HP アクセス数だが、それだけで評価をできるものか。

文化政策課長

情報提供等の支援の仕方は、様々あると思うが、実際客観的に評価する定量的な指標として取り上げるのは、この内容が適切と考えこの数値を毎年挙げている。この数値も、もちろん評価の一つとして必要だが、具体的な支援の仕方は多種多様にあると思っているので、定性的評価（勘案すべき内容）等も含め、評価は行っている。

D 委員

公演をする側として、情報提供の支援等により公演にいらっしゃる方は増えていっていると思うが、舞台に立つ人、公演を実施する側に対する、支援が減っていると思う。三の丸ホールでは、華やかな公演は多いが、地元の人の演奏の機会が減っていると感じている。

また、基本目標4 施策1「文化を創造する風土を高める」の文化活動をしやすいまちだと思える市民の割合が低いと感じた。

公演は、たとえいい公演であってもチケットが高くなる程、敷居も高くなってしまい行きづらくなる。ぜひ市で支援してもらい、そういった公演に子どもが無料で入れることができるようになればいい。海外では、学生は無料で公演を聴けるシステムがある。そういった機会を利用して、公演に行きたいと思う人が多くなるという。

文化政策課長

市の企画した自主事業でも、子供向けの企画などがあり、また料金体系についても、低価格にしたりする工夫がされている公演もある。

D 委員

子ども向けの企画ではなく、大人に向けたコンサートに、学生等が無料でいく事ができる体制ができるといいと考えている。

文化政策課長

令和7年度から指定管理者にかわる。ご意見として承る。

C 委員

日本は「子ども向けのプログラムを実施する」ことを子供向けと思っている。大人と同じ席に座って大人と同じ体験することが大事。確かに、日本は子どもと意識して分類している風潮がある。大人の公演に何人か子どもが入れるようになれば。

E 委員

日本の行政サービスは「受益者負担」が原則である。事業の参加者が負担することになる。子どもの負担を無くすか軽くするためには、主催者が国や県に助成金申請をして、事業費を賄うことが一般的である。

F 委員

欧米にはしっかりとした財団があり、企業を募るなどして、民間企業プレゼンツで公演を実施している。そうでないとお金が回っていかない。

A 委員

お金もちろん大事だが、小さい頃の体験が大事とも思う。実際に子どもが体験できる環境等を準備し、できれば低学年の頃にやらせてあげられるといい。京都の祇園祭では、子どもにもお手伝いをさせている。

C 委員

秦野市ではライトや音響等、ホールのスタッフを体験できるツアーがある。

E 委員

三の丸ホールでも、今年初めて実施した。

C 委員

本物を扱えると、感動が全く違う。非常に大事なことだと思う。

A 委員

お城では、子どもがガイドする歴史ガイドを時々実施している。子供にとっては貴重な体験。自分のまちを愛する気持ちやまちへの理解も深まる。

B 委員

市民会館の歴史を掘り起こした時に、歌舞伎公演のパンフレットが出てきた。非常に立派なもので、小田原の代表的な企業の広告が並んでいた。当時も、市と商工会が取りまとめて実現が可能になったのだと思う。多くの会社にお問い合わせすることになるが、そういったことをすれば、公演での若い人たちへの無料チケットを作ることはできるのではないか。

演者の出演機会の減少は、高齢化が進んでいること・環境が整っていないことも原因であると思う。環境を整えるために、やはり、取組の拠点は必要だと考えている。小田原には、自治会のものであるが地区公民館が多くあり、これを開いてもらい、若い人に活用してもらえたい。そして、地区で実施したことを、最終的に三の丸ホールのステージで披露する、という流れを作りたい。地元の神輿やお囃子の保存会は体験等もさせているし、そういった活動を広める機会があるといい。公民館は自治会の持ち物なので、自治会が OK してくれないと実現は難しいが、行政の仕組みの中で、利用できるようにしてほしい。

G 委員

自治会の中でも、地域によってやり方が違う部分がある。それぞれの地域で続けてきたやり方と考え方があるので、統一しようとする大変な反発が起こる。

B 委員

公民館を使って無料のイベントをやる、という情報を地域に発信できれば、公民館を利用したことがない人も来ることができ、今後公民館を広く活用するきっかけになるのではないかと考えている。

A 委員

子供会が解散し、自治会に入らない人が各地域に増えてきた。文化を伝えていくためには大きな痛手である。市から助成などの支援をしてもらえるといいのだが。

C 委員

地区公民館は地域単位である。活動も地域単位。地域の活動ではない別の活動がうまく地区公民館にマッチングできない。これはどこの地域でもそうで、とてもハードルが高い。

G 委員

小田原の公民館は、各地区でお金を出してつくったもの。市町村によっては、行政がお金を出して公民館を建てている。長い間独自でやっている部分もあり、そう簡単に全自治会で同じ動きはできない。自治会連合会の中でも、財政状況は全く違うのが現状。

F 委員

活動の場所というと、学校の活用等もあると思う。管理上難しい部分もあると思うし、今後確実に建て替えの問題が出てくると思うが、整備され、利活用できるといいと思う。プラットフォームを作って、どこの学校の施設が使えるなどの情報を流すと活用もできる。

C 委員

市内ですでに、地域の人が交流できるスペースを作っている学校もある。学校ではそういった場所づくりはされているが、地区公民館については課題。

H 委員

小学校では、学校ごとに地域に開放している。登録している団体であれば、使用は可能であると思う。学校が対応してくれている。文化事業でも使用できるかもしれない。

C 委員

新玉小は音楽室にひのきのステージがあると聞いている。ただ、学校側の管理が大変なので、活用するならばエリアは決めてやらないといけないだろう。

A 委員

施設を利用するうえでは、やりたいと考えている内容が、いかに開放的かというのも大事だと思う。自分たちの文化を守ることに専念してしまって、排他的になってしまう所も多い。体験教室等をやるなど、情報開示できることが必要。外の人を受け入れ、一緒にやっていけるようなコミュニケーションを醸成する文化活動が大事になってきていると思う。

E 委員

自分たちの活動を地域の人に理解してもらうのに 10 年くらいはかかる。地域の公民館を練習や発表の場、つまりクローズして使うだけなら、地域の人に受け入れられることはないだろう。公民館などの公共施設や、歴史的建造物は、立地する地域の特性や建物の機能性やその歴史などを鑑みて、活用方法を個別に検討する必要がある。

C 委員

基本計画の中で、まちなかでの文化活動を広げようと言っているので、広がっていかなくてはいけない。これから考えていく WEEK 事業等で、学校なども利用し、広げていく事を

検討する必要もある。

F 委員

アーティストさんが練習する場所や公演する場所がない状況は実際あるのだろうか。

H 委員

場所の取り合いではある。

F 委員

学校等今ある場所で、調整も必要だが利用できるスペースもあるので、活用のためいろいろな仕組み・方法を考える必要がある。

A 委員

令和5年度の評価については、アワードを加筆しましょう。定性的評価についても、今後もう少し多く加えた方がいい。R6年度に向けて検討してもらえたら。

C 委員

順調が多い。やや順調でいいのでは。評価しすぎている感がある。

(1) 議題 (2) 新たな文化振興施策の今後の検討について

事務局より説明

F 委員

このイメージ図には反対である。横に繋がる場が必要であり、市に事務局をやってもらいたいと考える。カルチャーアワードは実行委員を別で作ればいい。この案だと想定しているイメージとは違う。イベントをやるための組織となってしまう。常時常設で、横に繋がる組織を整備してほしい。

E 委員

イメージとしては、先ずプラットフォームがあって、何か事業を立ち上げる時に、その事業に相応しい人を選んでその都度実行委員会をつくり、事業が終われば実行委員会は解散する。そうしたほうが、人が固定しなくていい。

F 委員

プラットフォームをどうイメージするかだと思う。事務局は市になると思うが。

文化部副部長

市が持っているイメージは、委員の皆さんの話と全く違うというわけではないと思うが。プラットフォームのイメージをもう少し共有した方がいいと考える。

F 委員

イメージは全然違っていると思う。文化事業の実施・運営と書かれているが、プラットフォームはそういったことはしない。

A 委員

点在している文化事業・情報を、アワードをうまく使い、情報を集めるハブ拠点のような形のものを作っていけばいいのではないか。事業の実施や運営ではなく、どこで何をやっているというような、情報を閲覧できるようなハブ組織ができればいいと思う。責任を持って事業を運営するような組織、というイメージではないのでは。

C 委員

まずは、どういう団体が小田原で活動しているかを把握する、という所に着眼した方がいいと思う。それが一つの方法ではないか。

A 委員

案の中に記載してあるメンバーだが、事業をやっていない人を集めても話がわからないと思う。

F 委員

カルチャーアワードで、市内で活動している団体が把握できるようになれば、その団体を集めて情報共有が可能となる。そこに更に、観光や商業等に入ってもらい、施設等の情報を流せば共有できる。そこをベースに、事業毎に実行委員会が立ち上がるという。

E 委員

例えば、基本計画に掲げる小田原の 9 つの分野からそれぞれ、できるだけ若い世代の人に集まってもらい、プラットフォームの必要性や在り方について意見を求めてみてはどうだろうか。

文化政策課長

もう少し、イメージの共有・意見交換が必要と思っている。

C 委員

次の世代の方々に集まってもらい意見を聞くというやり方もある。こういった研究をする学生さんなどがいれば、意見を聞いてみてもいいのでは。

I 委員

短大は時間的な余裕はあまりないが、関心がある学生さんもある。学生に聞いてみないと、何とも言えない。

C 委員

高校生も総合学習などで研究している。そういった方法も含めて検討してみては。

F 委員

Z 世代にも、おもしろい意見を持っている人はたくさんいる。

J 委員

発言する機会にアクセスできない人も多いので、こういう機会があるのはいいと思う。

(1) その他について

事務局よりおだわらカルチャーアワード 2024 募集について説明